



尖農園でのワークショップに参加した皆さんの集合写真, 2023

写真: 下田学

みかんの苗木の旅 通信 vol.03

みかんコレクティヴ 20231222

みかんかく

廣瀬智央

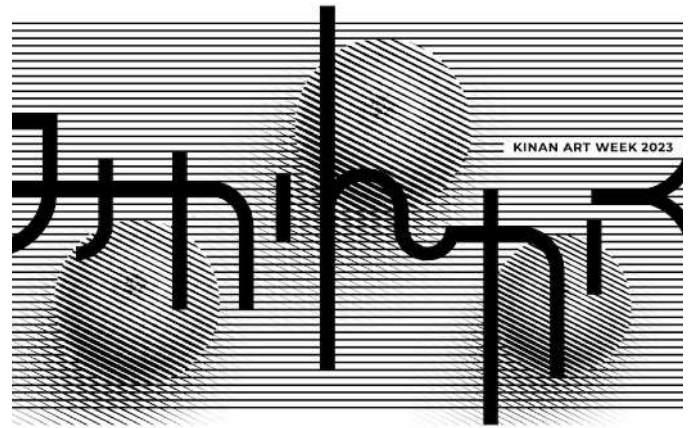
みなさん、こんにちは。今秋も紀南アートウィーク2023が開催され無事に終了しました。今年のアートウィークは、「みかんかく」というタイトルでした。「みかんかく」とは、みかん（蜜柑、未完…）+かんかく（感覚、間隔…）を掛け合わせた言葉で、人間のもつ多様な感覚、特に視覚以外の感覚にフォーカスしながら、様々なワークショップ、食事会や映画上映会、アーティスト・イン・レジデンスなどを行いました。今年の特徴はなんといっても作品展示がなく、ワークショップ中心の芸術祭だったことです。その中でくモモンズ農園>に関するワークショップを中心にこの通信でアートウィーク2023の様子をお伝えします。

1. ワークショップ『歩きながら識る、交流する』

くモモンズ農園の構想へ近づいていくきっかけ作りのひとつとして、参加者との間で目に見えない感覚を共有することを目指した体験ツアーを実施しました。実際に柑橘農園を訪れながら、みかんの栽培やみかんの知識やなどについての知識を深めるため、特にみかんや草花の香りを嗅いだり、触れたりと身体感覚を重視したツアーを行いました。ご協力いただいたのは、みかんコレクティブくモモンズ農園>のメンバーでもあり、このコラムにすでに登場いただいる小谷さんの尖農園です。



軽トラックでみかん農園へ移動
写真：下田学



紀南アートウィーク2023のキーヴィジュアル
デザイン：ColoGraphical

プログラムは、農園のみかん畑の中で、収穫体験や触覚、嗅覚、味覚などフルに働かせ身体感覚がすまされる体験をしていただきました。参加者の多くが田辺在住の方々に、みかんの産地に住んでいらっしゃるようですが、みかん畑を訪れる体験は初めてということで、大きな関心と喜び、楽しさを共有いただきました。特に人気のひとつだったことは、みかん畑がある山の登頂部までの軽トラックの小さな旅でした。スリル満点のプチ旅行も含めて感覚が研ぎ澄まされた体験だったと思います。



みかん農園で感覚を研ぎ澄ます
写真：下田学

くモモンズ農園>開園までこの企画を継続できればと考えていますので、関心のあるメンバーの方々はぜひご参加ください！この日の最後にくモモンズ農園>に関心を持っていただいている農家さんやメンバーとともに懇親会も行いました。交流の中では、未来のくモモンズ農園での関わり方や農園で実施したい希望など、様々な意見や考え方を述べ合う場になりました。<https://kinan-art.jp/info/14307/>

2. ワークショップ『いちどためしてごらん』

このワークショップは、視覚以外の身体感覚をフル動員させながら作品制作を実体験することで、知覚の曖昧さや感覚の豊かさ、視覚のみに頼らない感覚のあり方を考察しました。いつも私たちはことばや目によって世の中を理解しています。では、においやさわる感覚をもっと使ってみると、それはどう変わるでしょうか。ふだん見ているものがどう変わるか、まわりの人と自分の感じ方をつたえあって世界との関わり方を考える機会となりました。

<https://kinan-art.jp/info/14135/>



触れてみる感覚を楽しむ様子
写真：下田学

3. その他のワークショップ

未来の給食

食農倫理学を研究されている太田和彦先生の『未来の給食』は、食材の周りにおける環境や習慣、地域のことなども共に考えるワークショップでした。実際に考えた給食を作って食べるまで行うことで、リアルな食を体験することができました。
<https://kinan-art.jp/info/13661/>



2050年の未来の給食
写真：下田学

『目の見えない白鳥さん、アートを見にいく』& 『手でふれてみる世界』映画上映会

目の見えない人はどうやってアートを鑑賞しているのか？というテーマで日本とイタリアから、それぞれ視覚障害のある方がアートにふれる姿を描いた映画2本の上映会と岡野監督による触覚のワークショップ。こちらは紀南日報でも取り上げられました。
<https://kinan-art.jp/info/14074/>



上映会場となった紀伊白浜駅前のノンクロン、
写真：下田学



紀伊日報で紹介された紀南アートウィーク2023
写真：藪本雄登

インドのスパイス、ベトナムのハーブ、和歌山のみかんでチャイをつくろう!

今年のアーティスト・イン・レジデンスに参加したベトナム人アーティスト、トゥアン・マミ氏とラワンチャイクン氏によるチャイのワークショップ。インドのスパイスとベトナムのハーブ、和歌山の柑橘類に直接触れ、試し、観察することで、触覚、嗅覚、味覚といった感覚を研ぎ澄ましていきます。その際、インドのお茶文化のお話や、ハーブと共にあるベトナムの食生活に関する映像作を通して、異文化に繋がるひとときをつくり出しました。

<https://kinan-art.jp/info/13828/>



オリジナルチャイを作ってみる
写真：下田学

アーティスト・イン・レジデンス

ベトナムからアーティストのトゥアン・マミを招聘、「移民」と「柑橘」の関係についてリサーチを依頼し、継続的に調査を行う予定です。最終日に田辺市に住むベトナム移民と田辺市民や紀南アートウィーク関係者とコミュニケーションをとりながら鍋パーティーを開催しました。



トゥアン・マミ氏を中心にみんなで鍋を囲む
写真：下田学

柑橘ソムリエ講座 in 和歌山

みかんコレクティブ<commons農園>のメンバーの山本玲子氏と原拓男氏を中心とした、紀南初の「柑橘ソムリエ講座」も開催されました。柑橘を最大限に楽しみ、その魅力を伝えることのできるプロフェッショナルを育成する講座で、東京からも受講者が参加されるなど、大きな注目を集めました。

*「柑橘ソムリエ講座」については、次回のみかんの苗木の旅通信で詳細をお伝えする予定です。

ワークショップを中心とした様々なプログラムは好評のうちに閉幕しました。



紀南初の柑橘ソムリエ講座
写真：紀伊民報

みかんの旅 展

廣瀬 智央

2023年11月3日から2024年2月12日まで、長野県立美術館において「みかんの旅」展が開催されています。この展覧会は、昨年の紀南アートウィーク2022で発表された、アートプロジェクト< commons 農園 >の未来を予感させるインスタレーションをベースに、長野バージョンとして展示されています。



作品が展示されている長野県立美術館のアートラボ会場
写真：筆者

近年開館した長野県立美術館には、視覚のみならずさまざまな感覚を使って楽しむ作品を扱うアートラボが新設され、新たなアートを楽しめるようになっています。今回の展示では匂いをキーワードに、現在紀南で進めているアートプロジェクト< commons 農園 >を紹介することになりました。



紀南のさまざまな柑橘類ジュースを並べたインスタレーション
写真：筆者

この展覧会が開催されることになった経緯は、昨年開催されていた紀南アートウィーク2022に長野県立美術館の学芸員の方がお越しくださり、みかんに関心をもっていただいたことがきっかけになりました。アートラボでの企画として、身体を刺激する、みかんの香りやく commons 農園 >の新たな価値の創造という考え方などが、美術館のコンセプトとも合致しました。



みかんの旅展示会場風景
写真：筆者

「みかんの旅」展では、展示空間に入ると空間いっぱい広がるみかんの香りに包まれます。その香りは空間いっぱい広がっており、空間中央にはみかんのための家が設置されています。この家は、みかんの長野バージョンとして新たに展示されています。みかんの家は、鑑賞者の目線に合うような位置に建てられ、その中にみかんたちが入居しています。床にはみかんが点在し、家まで楽に到達するための階段も作られています。家は全て廃材を利用し



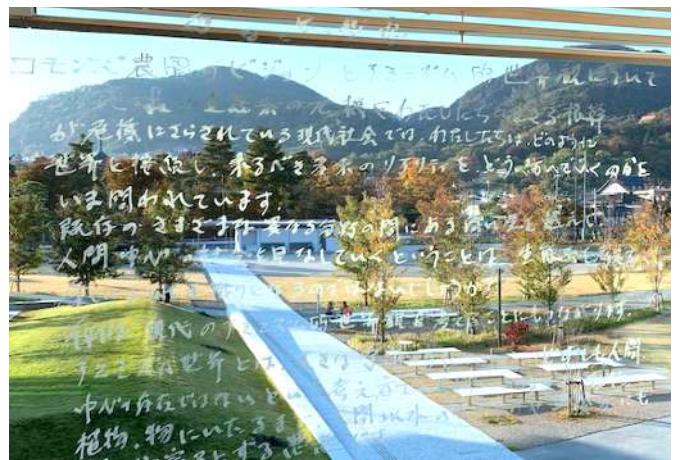
みかんのための家（部分）
写真：筆者

たもので建てられています。床から家までたどり着けるための階段も設けています。みかんたちは、たまにこの家から出て旅にも出ます。紀南から長野へ、長野からイタリアへとみかんの旅は続きます。そして、空間の中央には、昨年、摘果みかんで作られたみかんの紙も配置し鑑賞者はその紙にも触れることができます。その背後には、紀南のみかん畑をリサーチした際の映像も流れて、鑑賞者は紀南のみかん畑へと誘われいきます。



記録映像を鑑賞中の様子
写真：筆者

この展示を体感いただいた鑑賞者からの感想の中で印象的だったことのひとつに、長野県の方には、みかんへの憧れがあることをリアルに知らされたことです。長野県はりんごやブドウなどのフルーツ王国でもあるのですが、柑橘類だけは育たない気候で、それゆえに冬のみかんの到来を楽しみにしているそうです。みかんを毎年箱買いをされる方も多く、今回の展示で会場に広がるみかんの香りに癒されるといった感想をいただきました。また、<コモンズ農園>へ関心を寄せていただいた鑑賞者からは、苗木を育てる<コモンズ農園>に参加したいという方もいらっしゃいました。和歌山県を超えて長野県にこのアートプロジェクトと<コモンズ農園>の考えが広がっていく良い機会になったと思います。



会場の窓ガラスにかかれた<コモンズ農園>のビジョン
写真：筆者

廣瀬 智央



現在ミラノを拠点に活動。異文化の体験を推敲し多様な素材を用いて視覚化した、軽やかで浮遊感を伴う作品を制作。境界を越えて異質な文化や事物を結びつける脱領域的な想像力が創造の原理となり、日常の体験や事物をもとに、世界の知覚を刷新する表現を創りだす。世界各地で展覧会多数。www.milleprato.com

柑橘類おすすめの図書案内

Voi.2

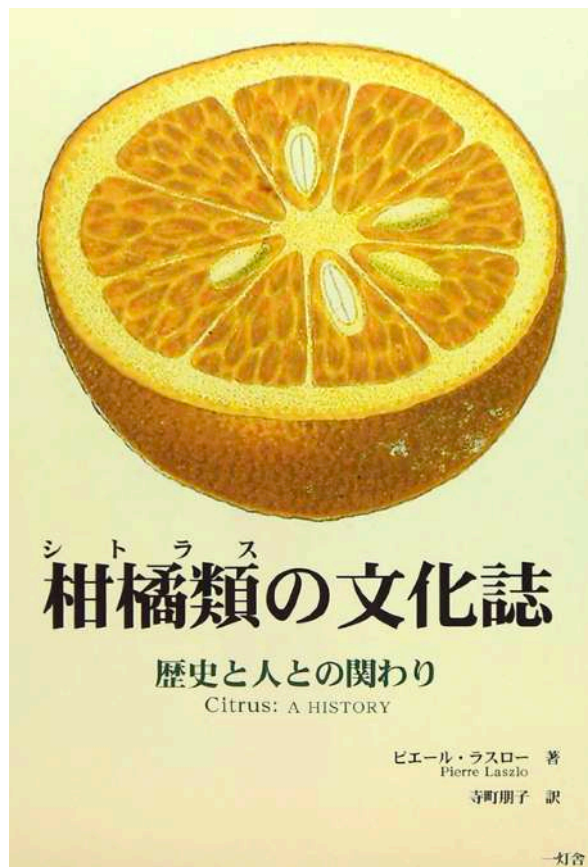
藪本 雄登

『柑橘類の文化誌 歴史と人との関わり』 ピエール・ラスロー（著）、寺町朋子（訳） 一灯舎、2010年出版

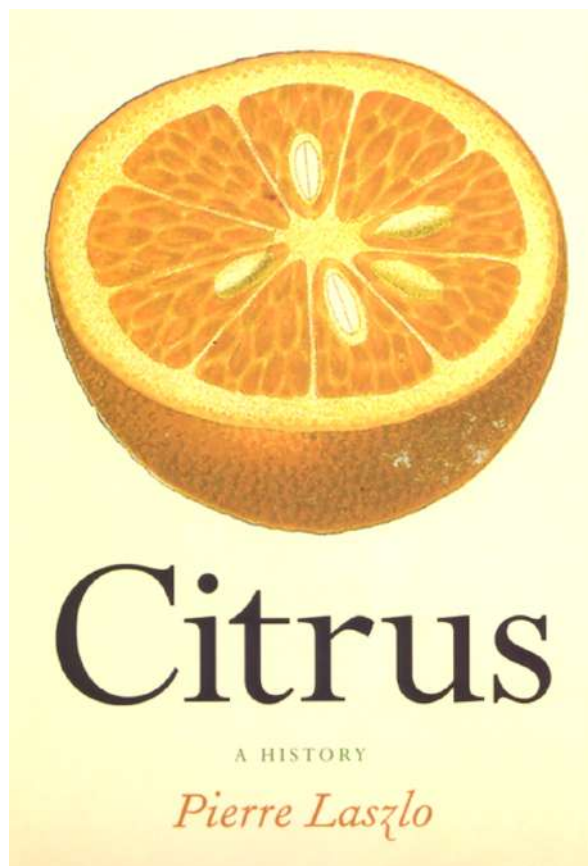
ピエール・ラスロー(Pierre Laszlo、1938-)は、「白い黄金」と呼ばれた「塩」を巡る政治や歴史を描いた『塩の博物誌』等で知られる国際的に知られた化学者である。その著名な化学者が、なぜ「柑橘」に取り憑かれてしまったのかは明かされないが、その気持はよくわかる。ラスローが、「オレンジは、太陽のシンボルであった」と述べるように、オレンジには吸い込まれてしまいそうな魅力／魔力がある。太陽と同様に、オレンジは、純粋たる贈与者のようであり、大いなる母性の保持者というイメージが確かにある。ときの支配者や権力者が「太陽」を政治的に利用する気持ちがよくわかる。その意味で、他者に「太陽の象徴」である柑橘を贈与すること（中国や東南アジア等ではよくみられる贈与行為）は、人間の本能に関わる「意味深な行為」なのかもしれない。さて、本書では、科学（化学）と文化（芸術）の境界を超えて、オレンジをはじめとする柑橘類の魅力を様々な視点から紹介している。柑橘類が世界に広がっていった歴史を中心として、本書では、柑橘類に含まれているビタミンなどの成分、香りに関する化学反応等のラスローの科学的な専門的知見に関する記述に加えて、柑橘類が貴重品であった中世の人々にとって、柑橘には、どのような意味があり、どのようなイメージとして捉えられていたのか、について私見が紹介される。特に、世界における柑橘類と絵画、文学、祝祭等の文化的な関係が説明されており、柑橘と文化芸術の関係を考える上では必読本ではないだろうか。

藪本 雄登

紀南アートウィーク実行委員長。十数年に渡り、カンボジア、ラオス、ミャンマー、タイ等に居住し、業務の傍ら、各地のアーティスト、キュレーター、アートコレクティブ等への助成や展示会の支援を行っている。現在、アジア太平洋地域の神話、伝説、寓話や民俗等に関心を持ち、人類学とアートについて研究を行っている。



日本語版 © 一灯舎, 2016



オリジナル版 © University of Chicago Press, 2008

竹やぶ

紀南秋津野地区でみかん農園を営まれている、竹やぶさんが綴る農業に関する日記から柑橘類にまつわる一部をご紹介します。農作業や日常の中で綴られる瑞々しい言葉が光ります。

冬のバレンシア畑より

農業を始めたころは、バレンシアオレンジの葉っぱに朝日が当たってきらきらする様などは、ただただ美しかった。木漏れ日や風のそよぎ、白く光る曇り空など、あらゆることに感動できた。

何年か経つと、同じ景色を見ても、この樹は摘果が遅れているなあ、このままやったらM果ばっかになってしまう、そもそも剪定ができてない、てか樹が古すぎ、全部伐って植え替えなあかな・・・というような勘定で頭がいっぱいになった。その状態がずっと続くのは、つらいことだと思う。

しかし更に何年か経つと、摘果が遅れているなあという「勘定」は働きつつも、朝日がきらきらしてきれいなという「感動」を、別の小部屋で並行して行えるようになった。



光の中で木漏れ日や風のそよぎ
写真：下田学

それからいろいろなことがあって、勝ちとか負け、かっこ良いとか悪いとか、金持ちだとか貧乏だとか、そういうのがあまり重要でなくなった今、同じ景色を見て思うことは、摘果が遅れていようが樹が古かろうが、それらの現象は自分が生きていることと一体で、それもまた良しで、それが朝日できらめ

いているのなら、そこにはもうただ感動しかないな、というようなことだ。そしてその感動は、もはやかつての小部屋などではなく、体全体で行われている。

こういった「統合現象」は、自分のこれまでの生き方からすれば当然の帰結だろうし、また「統合が善で乖離が悪」というわけではなく、おそらく繰り返していくのだろうというのも、直感している。冬のバレンシア畑より。



摘果みかん
写真：下田学

5カ年計画

柑橘の木は、植えてから数年は収穫量も少なく、品質も安定しない。収益に貢献するような「頼れる木」になるまでには、5年から7、8年の歳月がかかる。なので、ある年に植えた木に対して、「早くいい実を成らせてくれ～」と願ってみても、事態はいっこうに進展しない。5年というのは、期待しながら待つには長すぎる。それよりは、5年間、とにかく植え続ける。植えた木が、枯れずに元気であることを喜びとして基本管理を行いながら、5年間植え続けると、5年前に植えたやつが、忘れたころにいっぱいしの若者になっている。例年通りの出荷予定量のつもりが、そいつらのおかげで何割かオーバーする。そういうときに、喜びを感じる。

5年間植え続けると、5年後以降は毎年、新兵が入ってくる。まるで、春に植えた木が、秋に実をつけているようなサイクルになる。でもそのサイクルには少なくとも5年間のタイムラグがあり、それが軌道に乗るには、5年間の「これでいいのかしら？」という日々があるわけだ。若者が農業を継いだ時、素直に親や指導員や先人のいうことを信じて最短でこのサイクルを築き、改植を通年作業に組み込んだなら、果樹経営の難易度はそんなに高くないのかもしれない。

無題

冷たい北風の中、夕日に照らし出された真っ赤なみかん。これが僕の、心の原風景だ。

太陽は、茜色こそ冴えてはいるけれど、温かみはほとんど感じない。しかし「寒い」というのは感情である。心が燃えているときは、頬や手足は冷たくても「寒く」はない。

空は透明な色をしている。草やみかんの葉っぱは、青くつやつやとしている。そこに、濃縮された甘さを約束する、深い橙赤色の果実の群れ。色や形だけでなく、そこから想起される味もまた、欠くべからざる風景の要素である。

そのキャンパスに埋没して、我を忘れてみかんを採る時間は、何かもう言葉には表せない。静謐、冷たさ、狂気、恍惚、うん、とにかくなんだ、まあいいんだけど。

だがしかし、そういう幸せなときが無条件で与えられるわけでは当然なく、そしてまだまだ完全にピントが合っているとは言えない。だけど今後10年、20年と農業をやっていくにあたって、大いなる「予感」がある。かつてどこかにも書いた、みかん畑にたたく夢の話である。

僕はもう、答えを知っている。「答え」だけが、「夢」という形でもたらされることは、僕の人生の中で他にもいくつか例がある。何も知らないまま、「答えの世界」に投げ込まれるのである。しかし答えだけ知っていることは、あまり意味を持たない。答えの世界を理解するだけの経験や感性が、まだまだ磨かれていない状態で投げ込まれるので、ただただ「不思議で、ステキな感じ！」くらいにしか感じられないのだ。だけど今、いつか夢に出てきた「答えの世界」が、そう遠くない未来のどこかにあるという確信はある。だんだんピントが、あってきたている。いつかパシッと、「あ、ここやな。」という瞬間が訪れるに違いない。



大坊からみかん畑と海を眺める

写真：下田学

編集後記

「みかんの苗木の旅通信」の3回目の配信です。表紙は、今年のワークショップでお世話になった小谷さんの尖農園での集合写真です。みなさんの笑顔が絶えず、楽しんでいただのが大変印象的でした。コラムは、紀南から長野へ旅に出たみかんの展示会の様子をお伝えしました。今年もいよいよ終わりですが、みかんのシーズン真っ只中、大変お忙しいみかん農家さんのご苦勞と健康をお祈りしています。良い年をお迎えください。来年もどうぞよろしく願いいたします。

苗木の木の里親のみなさま、コモンズ農園に関心を持たれて参加を考えていらっしゃる方々、みかんを愛するみなさまとの交流やコミュニケーションを図るためのツールが、不定期発行の「みかんの苗木の旅通信」です。コモンズ農園が実際に動き出すまでもう少し時間がかかりますが、これからも、みかんの旅にお付き合いください。

この通信へのご意見やご提案、ご質問等ありましたら下記メール宛に気軽にお寄せください。

竹やぶ

機械いじりが好きで工業高校へ。その後カウンセラーの道を志すも、JAの荷受けやガソリンスタンド、コンビニ、ホテルの仕出し、土産物の製造工場、廃ビルの解体、タイヤ交換専門店、ラウンジのボーイ、などの様々職種を経て9年前から実家の農業を継ぐ。当たり前のことを丁寧に、誠実に。働く人にも自然にも持続可能な農業を目標に日々を実践中。

みかんの苗木の旅 通信 vol.3

編集：廣瀬 智央

発行：みかんコレクティブ

発行日：2023年12月 22日

infobox@milleprato.com